

「森三郎の作品を読む会」通信

第4号

2012年10月12日 発行

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

どなたでもいつの会でも参加できます

9月23日

森三郎刈谷市民の会 発足行事が行われました。

発足行事の中で「森三郎童話と刈谷」と題してパネルディスカッションを行いました。

パネリストの一人、愛知淑徳大学教授で、『森三郎童話選集かささぎ物語』(1995)の解説執筆者の酒井晶代(まさよ)さんは、その時の感想を次のように語ってくれました。

パネルディスカッションの間、抽象的な表現になりますが「作品にとって幸せとは何か」ということを考えていました。それはたぶん、「読み継がれること」なのではないかと思えます。

生意気な言い方になりますが、刈谷のみなさまにはうんと自由に森三郎さんの童話を読み広げ、読み継いでほしいと思つたことです。

また、名古屋経営短期大学非常勤講師で、「森三郎さんを偲ぶ会」(1994)世話人をなさった清水美智子さんも、今の時代に子どもたちが「赤い鳥」の作品を読むことの難しさと、だからこそこの会で「森三郎さんの作品をずっと読み続けてくださいね。」とおっしゃってくださいました。

児童文学作家で、刈谷市中央図書館で行われている「童話を書く講座」講師の野村一秋さんも、子どもたちに楽しい形で森三郎さんの作品を伝えてほしいとおっしゃいました。

先ずはこの会で、森三郎作品を読み通していきましょう。

2012年9月例会 報告

(9月14日 参加者6名)

「赤穴宗右衛門兄弟」(筆名 茅原順三)

を読む

初出「赤い鳥」1931(昭和6)年3月号

初めて「赤い鳥」紙上を飾った作品。

小泉八雲「約束」の再話

兄・森銑三(刈谷新三郎)と友人・萩原恭平との共訳の「小泉八雲選集」を子ども向きに書き直したもの

小泉八雲の「約束」の原典は、上田秋成の「雨月物語」中の「菊花の約(ちぎり)」。

「赤穴宗右衛門兄弟」の最後は

「小泉八雲といふ名で、日本の人になつてなくなつた、アイルランド人、ラフカディオ・ハーンは、日本のことを多くの本にかきました。その中の一つのお話です。」と結ばれている。

これは兄・銑三が「赤い鳥」1927(昭和2)年6月号に「小泉八雲(伝記)」を書いていることと関係あるだろう。

兄が初めて買ってきてくれた「赤い鳥」に夢中になつた三郎自身の子どもの時代、それと同じように1931(昭和6)年の今も、「赤い鳥」を読みふける子どもたちだったら、四年前の「赤い鳥」に掲載された森銑三の「小泉八雲(伝記)」を読んでいるに違いないという思いの現れと言えないだろうか。

「赤穴宗右衛門兄弟」のテーマ「昔の武士が人に対して約束をまもる、そのかたい義理だての一例」、これについては「太宰治の『走れメロス』を想像させる」という感想もあった。

「走れメロス」は1940(昭和15)年の作品。

ケータイで連絡できる現代の子どもたちは、なんとというだろうか。

(次回は 11月9日)